

アイルランド留学記

田付 秋子

2003年の暮れもおし迫った冬の日、雑誌『クリオ』にアイルランド留学記を書かないかというお話をいただいた。2000年9月から2002年9月にかけて2年間の留学をしてから、すでに1年以上の時が流れていた。それに、ヨーロッパ辺境の小国であるアイルランドで、それも歴史学の徒でありながらアイルランド語学科で学んだという一風変わった留学の記録に、関心をもたれる読者がどれほどいるのだろうか。正直なところ戸惑ったが、「珍しいから知りたいのです」という編集担当者の言葉に後押しされて、引き受けてしまった。この機に、期待と好奇心と緊張の入り混じった留学時代の気分を思い出しながら、アイルランドでの日々、アイルランド中世史研究を取り巻く状況などについて書いてみようと思う。

ダブリンの町、大学、アイルランド語学科

北海道とほぼ同じ面積のアイルランド島。その5分の4程を占めるアイルランド共和国は、人口390万人の小国である。大学の数は10にも満たなく、大学院レベルで中世史を学べる大学の数はさらに少ない。私は留学先として、単なる歴史研究ではなく古アイルランド法、つまり古アイルランド語で書かれた世俗慣習法文書について専門的に学べる場を探していたから、選択肢は本当に限られていた。ほとんど迷うことなく選んだのが、古アイルランド法研究の第一人者リアム・ブリャナハ教授がいる、ダブリン大学トリニティ・カレッジのアイルランド語学科である。

この学科には古アイルランド語の修士課程として、通常の研究コース（授業への出席義務はほとんどなく論文執筆に専念する）の他に、1998年に新たに設けられた受講コース、すなわち必須選択の授業数が決められ、筆記試験と論文によって評価を受けるコースがあった。後者のコースでは、1年目のディプロマの終了試験に合格しないと、2年目に修士号コースに進めない。ディプロマ・コースはDiploma in Old Irishという名称のとおり、アイルランド語初学者を対象に、1年間で古アイルランド語の徹底的な基礎力をつけさせるというものである（アイルランドの大学で古アイルランド語を修めていれば免除され、2年目のコースへ入ることができる）。カリキュラムは、文法、散文、韻文、それにチュートリアル計週6時間と、さほど多くはないが、実際に受けてみると授業の内容の濃さと進捗の速さは予想以上だった。2年目の修士号コースは名称がM. Phil. in Early Irishと変わり、古アイルランド語だけでなく、原始アイルランド語、中期アイルランド語なども含めて、古代末期から中世全体のアイルランド語を総合的に学び、写本テキストをそのまま読めるようになるレベルを目指している。散文、韻文のほか、選択科目として中期アイルランド語・古アイルランド法・比較言語学のいずれかひとつ、さらに毎学期2回学外から講師を迎えてのセミナーと、学生が自らテーマを決めて発表するプレゼンテーションの課題があった。この受講コースは、短期間で集中的かつ体系的にアイルランド語を学びたいという私の目的には最適だと思われた。

トリニティではブリャナハ教授が大学院セミナーで法律文書講読を行っていたし、市

内のダブリン高等研究所でも毎年法律研究のセミナーが行われていた。トリニティ・カレッジの図書館はヨーロッパ有数の規模を誇っており（とはいえ、非英語圏の文献の少なさには驚いたが）、トリニティとならんで中世写本を多く所蔵するロイヤル・アイリッシュ・アカデミーは大学から100メートルも離れていない。古代・中世の遺物を目の当たりにできる国立博物館や、国立図書館へも歩いて5分足らず。市内には歴史研究が盛んなユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン（UCD）もある。もちろん地方にもメヌース、ゴルウェイ、コークなど、著名な歴史研究者をスタッフに抱える伝統ある大学があるが、このような恵まれた研究環境も、トリニティ・カレッジを選んだ理由のひとつであった。日本では研究文献を集めるのにも苦労していたから、まるで夢のような環境である。

アイルランドには、1995年冬と1998年夏の二度訪れたことがあった。初めて旅行した冬の印象は、雨、強風、暗くどんよりした空、煤けた活気のない町…。物価も決して安くない。「旅行ならよいけれど、ダブリンには住みたくはない」と思った。しかし、2000年9月、とうとうその町に住むことになってしまった。研究への期待は大きかったが、生活にはまったく期待せずに向かった。おかげでたいした失望も苦労もなく、現地での生活に馴染むことができたのかもしれない。そうはいっても、1年目のホームステイ中は、アイルランド家庭の、味付けといい素材といい極端に単調な食卓に少々辟易した。どちらが付合せだかわからない大量の茹でジャガイモと肉というのが基本である。2年目には自炊の下宿に移ったので、ジャガイモ問題は解消した。しかし市中ではおいしいパンやケーキの類にはまずお目にかかれぬ。それでも95年当時と比べると変わったこともある。90年代後半以降の好景気で、ダブリン市内ではカフェやイタリア料理店などのレストランが飛躍的に増え、ワインやエスニック料理（日本食も含め）も市民権を得た。ビル建設が目立ち、市内の道路混雑緩和を目指して初の地下鉄工事も始まった。何より、町に活気が溢れるようになった。

アイルランド随一の「大都会」である首都ダブリンも、東京から訪れた者の目にはまことにこじんまりした地方都市に映る。1キロも歩けば、市の中心部の繁華街は抜けてしまう。トリニティ・カレッジはその小さな都会のちょうど中心に位置する。1592年にエリザベス一世が創設。以来長い間、学生はプロテスタントに限られる、支配階級のエリートの教育機関であった（一方、カトリックの子弟の教育機関として作られたのが前述のUCDである）。現在に至るまでアイルランド一の名門大学である。もちろん今ではどの宗派・宗教の学生も受け入れ、アメリカやヨーロッパからの交換留学生や、中国などアジアからの留学生も多い。入学願書には宗教を申告する欄があるが、これも形骸化している。敬虔なカトリック国のイメージが強いアイルランドでも、最近では若い世代ほど教会離れが進み、教会へ行くのはクリスマスだけという人が多いのが実状だ。

キャンパスには17世紀のレンガ造りの建物、18世紀の石造りの建物群など歴史的な建物が多い。車の往來の激しい表通りを背に、夜は重厚な木の扉が閉められるアーチ型の正門をくぐって学内に入ると、周囲の喧騒を忘れさせる落ち着いた佇まいである。古い石畳、緑の美しい芝生、重厚な石の建物。オールド・ライブラリーには微細な装飾で有名な中世福音書写本「ケルズの書」が展示されている。必然的に、大学は市内有数の観光スポットになっている。観光シーズンが始まる5月ともなると、アメリカからヨーロッパ大陸から団体旅行の客が押し寄せ、オールド・ライブラリー前に行列をつくる。

ちょうど大学の試験期間と重なるので、学生は観光客の列をかき分けて試験場へ急がなくてはならない。ところで、歴史学科やアイルランド語学科などが入っている文学部の建物は、1960年代の無粋な現代建築である。内部の壁はブロックが剥き出し、10人も入れば満員の、狭くて窓のない教室が多い。薄暗い長い廊下は、いくつもの重い防火扉でしきられている。まるで刑務所のようなその建物が「バビロンの空中庭園」に想を得たもので、階段状になった建物の各階のテラスに植物が植えられる予定であったということを知った。予定は実行されず、外観も内観も庭園とはほど遠い殺風景な建物である。照明が薄暗く、おまけに冬中暖房が故障し、深々と冷え込んで勉強どころではなかったパークリー図書館といい、キャンパス内の新しい建物はどうも印象が悪い。

9月末にまず登録があり、ついで大学院のオリエンテーションで学生生活全般についての説明を受けた。途中の休み時間に市内の有名カフェのコーヒー、紅茶がソーサー付の陶器のカップに注がれて、クッキーなどとともに出された。さすが紅茶の国と、妙なことに感心する。アイルランドの国民一人当たりの紅茶消費量は英国を上回って世界一なのである（意外なことにビール消費量は世界一ではない）。10月半ばに授業が始まってみると、同コースの学生はたった4人であった。社会人入学のイギリス人、外交官を定年退職したアイルランド人、そして日本人学生が2人。最初は不思議に思ったが、中世アイルランド語を熱心に勉強しようというアイルランド人学生は少なく、むしろ外国人のほうが熱心なのだということに、じきに気づかされた。学科の大学院にはロシアやオランダからの留学生もいた。一方アイルランド人学生の間では、中世・現代を問わずアイルランド語の不人気が甚だしい。アイルランドではごく一部の地域を除いて日常生活は完全に英語化している。多くの人々にとって、現代アイルランド語は高校までの教育課程で仕方なく学んだ言葉であり、いったん学校を出てしまえば忘れる一方というのが典型的なパターンである。以前は公務員試験や教員試験にアイルランド語が必須であったが、現在はそうした規定もなくなった。90年代後半以降の史上初ともいえる好景気の陰で、ビジネスやキャリアに結びつかないアイルランド語離れは進む一方に見える。大学のアイルランド語学科も当然人気がなく、学生の質は年々下がってきているという。トリニティでも、学部生のあまりの意欲の低さに、先生方は度々嘆いていた。

アイルランド語学科で中世アイルランド語を担当するスタッフは、古・中期アイルランド語、古アイルランド法及び詩に造詣が深いブリャナハ教授、原始アイルランド語の形態・音韻論やオガム碑文、中世後期の詩などを得意とするマクマヌス教授、そして比較言語学、大陸ケルト語、古アイルランド語音韻論等を専門とするドイツ人のウーリッヒ博士の3人である。文学分野は弱いのが、言語研究分野でこれだけ幅広く質の高いスタッフが揃っている大学はアイルランドでも他にない。最初はブリャナハ教授のきついダブリン訛り（busを「ブス」と発音するのがダブリン子である）や、ウーリッヒ先生のドイツ語訛りに悩まされたが、必死に授業を聞くうち直に慣れてしまった。ともかく、どの先生も文字通り目を輝かせながら授業をする。その熱意には圧倒されるものがあった。比較言語学や歴史言語学を援用して文法事項の説明をしながら、「エキサイティングじゃないか！」と大きな目をさらに見開いて言うウーリッヒ先生の表情、普段はとつきにくい雰囲気ブリャナハ先生が楽しげに授業をする様子など、いまだに印象深い。

1年目は、コースの授業の他に、学部の法律文書講読とパレオグラフィの授業、それ

に外国人学生向けの現代アイルランド語初歩クラスにも出席させてもらった(おかげで、学部生はやる気がないと先生方が嘆く気持ちもよくわかった)。外国人向け授業と古アイルランド語を別とすると、学科の学部の授業は概ね現代アイルランド語で進められている。現代アイルランド語は文法をほんの少しかじった程度の知識しかなかったのだが、パレオグラフィの授業はテキストの文章をアルファベットで読み上げたり、黒板に省略記号を書いたりといったことが中心なので、大して問題はなかった。この授業では7世紀から18世紀までのアイルランドの写本を取り上げ、1年間で一通りパレオグラフィの基礎を学べるようになっていく。ちなみに学科では、掲示板の掲示物の大半がアイルランド語で書かれていて、次第に見当がつくようになったものの、最初は戸惑ったものだ。

雑誌論文掲載まで

最初の学期は瞬く間に過ぎていった。12月初旬に冬休みに入る頃には、街はクリスマスの装いとなり、飾り用の樅の木が街頭で売られたりと、すっかり年末の雰囲気となる。寒さこそさほど厳しくはないが、やはり北国であり、朝は9時過ぎまで明るくならず、やっと顔を出した太陽も午後3時過ぎにはさっさと沈んでしまう。ゴルウェイ大学に初期中世史のオ・クローニン教授を訪ねたのは、そんな時期だった。先生に面識のある友人が紹介してくれたのがきっかけで、少し前にコンタクトをとっていたのだ。その時点での私の関心は法律文書にあったが、2年前に書いた修士論文なら先生の研究分野と重なる部分もあろうかと思い、内容をごく簡単に書いた手紙を送ったところ興味を持ってくださり、時間をとって話を聞いてくださるというお返事をいただいた。

ダブリンから列車で西へ3時間ほど。ゴルウェイはアイルランド西部の主要都市で、大学はアイルランド語・ケルト研究で有名だ。東部よりさらに雨の多い西部地方だが、訪れた日はたまたま薄日が射し、先生は「君たちは大変幸運な時にゴルウェイに来たね。」と迎えてくれた。研究室は、キャスリーン・ヒューズやトゥルナイゼンなど、アイルランド中世史と古アイルランド語研究の碩学たちのポートレート写真が壁を飾る、いかにも歴史研究者のものらしい重厚な雰囲気であった。私は修士論文の内容を改めて英文レジュメにまとめたものを手渡し、一時間ほどかけて説明をした。緊張して、何をどのように話したのかも覚えていない。先生は熱心に耳を傾けてくださり、いくつか参考にすべき研究を挙げられた後、論文を自身が編集に携わっている雑誌 *Peritia* へ投稿してみないかと薦められた。*Peritia* といえばアイルランド中世研究の代表的な学術雑誌のひとつである。「書いたものを読まないと言えないが、今日聞いた内容ならきっと通るでしょう」という予想外の言葉に、嬉しいというより、正直なところ驚きのほうが大きかった。英文原稿を送る約束をしたのも、掲載はともかくとして、この機会に英訳して先生の批評をいただければという気持ちからであった。

約束はしたものの、翌年1月早々から再び授業に追われる日々が始まり、作業はなかなか進まない。投稿論文としての体裁を考え、修士論文の前半部分に加筆修正を加える形で初めから英文で書き直すことにした。何とか原稿をまとめてオ・クローニン教授に送ったのは9月初旬のことであった。その際、同級生のギャロイド・オ・クレリーにお世話になった。彼は高校・大学時代に古典語を学びいまだにラテン語に堪能、しかもアイルランド史にも通じているだけに、原稿をととても丁寧に読み、英文のチェックにと

どまらず内容についても有益なコメントやアドバイスをしてくれた。

話はそれるが、ちょうどその頃ニューヨークで同時テロ事件が発生した。事件そのものの衝撃も大きかったが、アメリカとアイルランドの一方ならぬ深い関係を改めて感じさせられた事件であった。テロが起きたのが火曜日。その週の金曜日は、アイルランドでは国を挙げて犠牲者の喪に服し弔意を表す日として臨時の休日となり、学校も会社も商店も休業、大統領をはじめとする要人がダブリン大聖堂の追悼ミサに臨んだ。大量の移民がアメリカへ渡っているのに、家族や友人知人を事件で亡くしたアイルランド人も相当数いた。私の知人も、ニューヨークで消防士をしていた従兄弟を亡くしている。しかし、彼はその後のアメリカの行動には大いに憤慨していた。私の周囲には同様の意見のアイルランド人が多かった。結局アイルランドはアメリカの犠牲に深い同情を示しつつも、軍事行動には慎重な対応をとり英米の“solidarity”に追従することはなかった。

さて、その後11月にダブリンで行われたダブリン高等研究所ケルト学部門の年次大会でオ・クローニン教授に再会した時に、掲載決定の知らせを受けた。それから雑誌の編集主幹であるコーク大学のオ・コラーン教授から内容に関して2、3の確認があり、続けて掲載原稿の校正がメールで送られてきた。雑誌の発行予定は12月だったが、その一連のやりとりは12月も押し詰まってから、年を越して行われていた。その様子を見ていた下宿先の家主の女性が、「内容はわからないけれど、校正なら任せて」と言って原稿の最終チェックを快く引き受けてくれた。彼女は以前、アイルランドでは名の通った小出版社を主宰していた元編集者なのだ（すでに会社をたたみ、今は絵の勉強をしている）。赤鉛筆を持つと真剣な目つきになって、あっという間に誤植と英文チェックをしてくれた。雑誌は年を越した2002年春、数ヵ月遅れで発行された（奥付にはそのまま2001年12月発行と書かれている）。自ら投稿することなど考えてもいなかった *Peritia* への論文掲載は、こうして多くの人々に助けられ励まされているうちに、自然と実現してしまった。きっかけをつくってくれた友人とオ・クローニン教授に感謝する他ない。

試験、休暇、そして2年目

話を先へ急ぎすぎたようだ。2001年5月に1年目最後の学期が終わると、1週間ほどの間において筆記試験が控えていた。ディプロマ・コースでは1回3時間の筆記試験が二つ。筆記試験など受けるのはおそらく大学院入試以来のことで、少々不安になる。何十年ぶりに試験を受けるギャロイドは年甲斐もなく、傍から見るとほほえましいほど真剣に心配した面持ちで、試験の1ヵ月以上も前から大騒ぎであった。3時間あるとはいえ、過去問（大学のウェブサイトダウンロードできる）を見ると問題の量もそれなりに多い。大半は授業をきちんと理解していればこなせそうだが、“unseen passage”といって、初めて読む古アイルランド語の文章を訳せという問題もあった。学部生に戻った気分でノートの整理をしたり単語を暗記したりして試験に臨んだ。この時の試験会場は *theatre* という、卒業式などを行うホールだった。天井が高く、木製の年代物のシャンデリアが下がり、床は白黒市松模様の大大理石。奥は一段高く、教会の後陣のように細長い窓が半円形を描いて並んでいる。試験監督の先生は黒いガウン姿。厳粛な雰囲気になるのかと思ったが、学生たちは慣れたもので、飲料・食料持ち込みで途中トイレに立ったりしながら3時間の長丁場を乗り切っている。しかし試験時間はあっという間に過ぎて

いき、時間が足りない私には、到底そんな余裕はなかった。

5月末。試験が終わったあとの解放感というものを徐々に味わった。ちょうどこの頃から、雨ばかりで寒々としていた天候もようやく初夏らしくなり、爽やかな晴天の日が多くなって来る。日も長くなって、開放的な気分になり、図書館や教室で時間を過ごすのはもったいないくらいだ。試験前図書館にこもっていた学生たちは、試験が終わると羽が生えたようにいなくなってしまう、学内は閑散とし、いるのは観光客ばかりだ。しかし私は、その年の長い夏休みの大半をダブリンで過ごした。夏の間は日本から訪れている研究者も多い。狭い町なので、連絡を取らなくても「誰々が来ているらしい」とすぐ伝わり、また噂を聞く前にご本人にばったり出くわすことも多い。友人知人が次々と旅行で訪ねてくるので案内に忙しい季節でもあった。また、7月の終わりには東の間ダブリンを離れ、友人たちとアイルランド北西部ドニゴール地方の辺境の谷グレン・コラムキルまで車で旅をした。6世紀の聖人でアイオナ修道院の創設者として知られるコルムキレゆかりの地である。木がまばらにしか生えない、雄大にして荒涼たる風景のなかで出会うのは、羊か牛ばかりという土地だ。いつまでも明るい夏の夕方の谷を、強い西風にふかれて寒さに身を縮めながら歩いて、この地からはるかスコットランドまで渡っていったコルムキレの生涯のことを思った。

夏休み中には、ロイヤル・アイリッシュ・アカデミー主催の「初等ギリシア語講座」2週間集中コースにも参加してみた。参加者の大半は学校の先生で、比較的年配の方が多く、私は若い外国人というので珍しがられたが、古アイルランド語を学んでいるというと、ますます好奇の目で見られた。空き時間にはカフェテリアでコーヒーを飲みながら予習・復習したり、クラスメートと雑談をしたり。しばし自分の研究から離れた楽しい日々であった。

だが、頭の片隅には常にあと1年しかないという思いがあった。7月末の試験結果発表で翌年の修士コースへの進学が決まったので、コース必須の修士論文のことも気になってきた。テーマは中世アイルランド語に関連していれば何でもよいとされている。私はもちろん、古アイルランド語の世俗慣習法に関することに取り組もうと決めていた。1年という時間の枠のなかででき、しかも現地にいなければできないことを考えた結果選んだのは、法律文書の編纂・翻訳作業であった。古アイルランド語の法律史料を読むうえで、校訂編纂作業の基本的なスキルはほとんど必須といってよい。写本の多くは古アイルランド語のオリジナル・テキストが書かれた8世紀から数世紀を経た13、14世紀以降のものであり、長い年月にわたって筆写を繰り返されたために筆写ミスがあるだけでなく、中期アイルランド語の綴りや語形に改変されていることも多い。そのため、オリジナルの文章や語形を推測し復元していかなくてはならない。信頼できる校訂版が限られている現状では、法律史料を読む場合、歴史研究者といえどもこうした作業を自ら行わなくてはならないから、校訂編纂で重要な業績を挙げているブリャナハ教授から直接教えを受けられるのは、またとない機会である。そこで、まだ夏休みのうちに先生に相談に訪れた。史料の校訂編纂をやりたいと言うと、開口一番「難しいよ。」と応えられた。それを承知でやりたいと言うと、それならば短いものを選んでやってみようということになり、『シェンハス・モール *Senchas Már*』という8世紀の法律文書集の中から、校訂・訳が出されていない短い文書を一編、選んで下さった。

作業はまず、D. A. ビンチー編の未校訂・未翻訳史料集 *Corpus Iuris Hibernici* (Dublin 1978) 中からすべての異本を探し出すことから始めた。あらかじめ特定されていた主要な版以外に、断片テキストが数点見つかった。次にそれらをもとに、異読を抽出し、オリジナルの語形・文章を復元していく。その過程では古アイルランド語、中期アイルランド語、パレオグラフィなどの知識を総動員しなくてはならない。しかもテキストの短い文章は一定の法律の知識を前提として書かれているので、それを知らずに読むとまるで意味を解せず、訳をつけることもままならない。テキストを分割して、一回に数パラグラフずつ復元テキストと訳を試みてはブリヤナハ教授の元へ持参し、様々な指摘、訂正、意見をもらい、原稿を直す。その過程を繰り返し、2 学期目の終わりにようやく、ひととおり復元テキストと訳の完成にこぎつけた。ただ、ビンチーの刊本には時折転写ミスがあるので、正確を期すために写本そのものに当たる必要がある。試験期間による中断をはさみ、夏休みに入ってから刊本のテキストと写本テキストとの照合を行なった。断片を含めると全部で 10 点ある写本テキストのうち、7 点がトリニティ・カレッジにあった(残る 3 点はオクスフォードとコペンハーゲンにあり、実見していない)。

トリニティ・カレッジが写本を収容している「写本室」および「写本修復室」は、例の「ケルズの書」が展示されているオールド・ライブラリーの一角にある。「ケルズの書」のごとき国宝級でなくても、中世写本は学生にはすぐには見せてもらえない。ファクシミリ版やマイクロ・フィルム版があるものは、まずそれらを見て照合を済ませる。しかし、マイクロ・フィルムでは、ファダ(長音記号)か汚れかの判断がつかなくなったり、欄外に書き込まれた註釈の小さな文字が読み取れない部分がある。そうした部分を予めすべてノートに書き出したうえで、現物を見せてもらうことになった。福音書写本とは異なり、法律文書写本の大きさは現代の四六版程度とかなり小ぶりで、装飾文字も彩色もごくわずかだ。稀に赤が使われるほかは黒インク一色で、細かな文字がびっしりと並んだ紙面は、写本というより誰か昔の人のノートを見ているような感じを受ける。現物を見るとインクの違い、書き手の違いなど、マイクロ・フィルムでは判然としなかったことがはっきりとわかり、汚れかファダかという問題もたいてい解決した。結局、本文テキスト中で 1 箇所、ビンチーの刊本の誤りを確認できたほか、註釈中のファダの転写ミスなどを数箇所発見した。テキストの作業はこれで一段落し、最後に写本についての解説、使用されている言語の分析、テキストの内容についての解説を書き、訳注付けと註釈部分の訳出などをして、ようやくひとつのエディションができあがる。異読の抽出とオリジナルの語形復元などは、非常に細かな神経を使う作業であったし、言語分析などは私の能力の限界を超えているのではないかと思う部分もあった。我慢強く付き合ってくださったブリヤナハ教授の助力なしには、到底なしえなかったと思っている。

写本室通いは、トリニティ・カレッジの生活のなかでもとりわけ楽しく、印象に残っている。司書の人も写本のプロであり、トリニティ・カレッジ図書館所蔵写本カタログを繰っていると、「ああ、その書き込みはストックスの字ですよ」などと、20 世紀初めの学者の名前を挙げて教えてくれる。実はその書き込みは、写本の書記が記した年号の解読に関わるもので、かなり重要なものであった。ブリヤナハ教授にその箇所を確認すると、たしかにその書き込みの内容は正しかったのである。些細なことようだが、写本室に置いてあるあのカタログを見なければ気づかずに見落としていただろう。

書き込みはともかくとして、現地の研究者の間でのみ共通認識となっている事柄が、案外多いのではないだろうか。そのことを切実に感じたのは、古アイルランド語の辞書に関してである。古アイルランド語の標準的な辞書である *Dictionary of the Irish languages* (Dublin: Royal Irish Academy 1983) は、研究者間で Dictionary といえばこれを指し、語源辞典などをのぞけば現在使用されている唯一の辞書といってよい。しかし、辞書というよりワードリストに近いものであり、訳語についても注意を要するものだと以前から認識していた。実際、研究者たちの評価はよいとはいえず、授業のなかでも、ことあるごとに辞書の欠点や不備を指摘するのである。曰く、見出し語の取り方が古アイルランド語表記だったり中期アイルランド語表記だったりの一貫しない、語義が十分網羅されていない、稀な単語が記載されていない、「ばか」を引くと「あほ」を見よとあり、「あほ」を引くと「ばか」を見よ、式の定義がある、云々。訳語も、既存の翻訳や研究文献からの引用を列記しただけという程度のもが多い。あるとき、ブリャナハ教授のポロポロに使い古された辞書に、たくさんの鉛筆書きの書き込みがあることに気づいた。それを見て、先生が「辞書にない語義」や「辞書にない単語」に言及するたびに、私も辞書へ書き込むようになった。研究文献などから得た情報もなるべく辞書に書き込むようにしている。この辞書は、いずれ大幅に改訂されるか新たなものにとって代わられるかするまでは、研究者各自が自分で耕して使っていかななくてはならないようだ。ラテン語などの常識からすれば考えられないようなことだろうが、古アイルランド語研究の状況をよく示す事例といえるかもしれない。

古アイルランド法の授業・セミナーのことなど

トリニティ・カレッジでは語学漬けの日々であったが、とくに2年目には機会に恵まれ、いくつかの法律研究の授業やセミナーに出席することができた。そのひとつが2001年からトリニティ・カレッジの中世史学科で開講された「古アイルランド法」の授業で、学外からダブリン高等研究所のファーガス・ケリー教授が招かれて教鞭をふるった。古アイルランド法に関しては、ケリー教授の著書 *A Guide to Early Irish Law* (Dublin 1988) を除くと入門書らしいものもないので、授業内容そのものに関心があったし、学部生にどのようなレベルでどのような教え方をするのかにも興味があった。そもそも中世史研究における法律への関心の低さは、これまでトリニティで関連する授業がなかったという事実にも現れている。その最大の理由はやはり、言葉の壁であったようだ。事実、授業に参加した歴史学科の学生のなかで、古アイルランド語を学んでいる者は皆無だった。私のように、古アイルランド法を何とかして歴史の史料として使いたいがために留学した人間にとっては、これはちょっとしたカルチャー・ショックであった。どうやら、中世史学科とアイルランド語学科の間にはかなり深い溝があるらしい(学科の雰囲気もずいぶん異なる。歴史学科は秀才タイプの学生が多く、英語の話し方ひとつとってもブリティッシュな雰囲気がある。一方のアイルランド語学科は、学生も教授をファーストネームで呼ぶような気取らなさで、飛び交う英語ももちろんアイルランド訛りだ)。しかたなくケリー教授は、英訳のあるテキストのみを史料として用いるよう配慮しながら、最低限必要な古アイルランド語の用語だけは原語で覚えるようにという方針で臨んだ。講義の内容は、古アイルランド法について一通りの基本知識を押さえたものだが、知識の

詰め込みではなく、古アイルランド法の原理原則や発想法に親しんでもらおうというのが眼目であった。「もしケイトがジョンとの契約に違反して支払いを怠ったら、ジョンはどんな手段をとる？」というように具体的な状況を出して、学生に考えさせていくのである。実のところ、私にとっては授業の主たる内容よりも、ケリー教授の余談のほうが面白かった。編纂手法の不手際や誤訳で悪名高い *Ancient Laws of Ireland* (Dublin 1865-1901) が、古アイルランド語の専門家も満足に揃わないのに刊行を急いだのは、その少し前に出たウェールズ法集成への対抗意識からだったとか、あるいは同書が *fintiu* (親族の土地) という語を「部族の土地」と訳したために、中世アイルランドには原始共産制があったと誤解されたというエピソードなどは、ほとんど笑い話である。

また、ブリャナハ教授の院生セミナーにも参加した。院生セミナーとはいっても、前述のケリー教授や UCD で教鞭をとるケヴィン・ブリャナハ博士 (トリニティのブリャナハ教授の弟) とその夫人でやはりアイルランド語研究者ニク・ロフリン (トリニティではパレオグラフィを担当)、トリニティのウーリッヒ博士など錚錚たる研究者やダブリン高等研究所の若手研究員たちがざらりと並び、少数派の大学院生はむしろ小さくなっているという授業であった。余談ながら、彼らは学会などでも一緒に行動することが多く、学派というより、まさにブリャナハ教授をドンとする一族郎党という趣があった。セミナーでは常に未編纂・未翻訳の法律文書を取り上げて講読してきたようだ。ブリャナハ教授の入念な準備の仕方、参加研究者たちの知識の深さと、彼らの丁々発止のやりとりなどに感銘を受けつつ、ただひたすら追いつく限りのスピードでノートをとった。解釈に詰まる箇所が出てきたときに、彼らがどのような手順で思考を重ねていくのか、それを垣間見ることができたことも、大いに参考になった (ただちに真似ることができるかは、また別なのだが)。しかし何といっても圧倒的だったのはブリャナハ教授の法律文書に関する知識の深さであった。青い目の眼光も鋭く、次々と指摘を繰り出し、参考例を挙げていく。トゥルナイゼンの文法書のどこに何が書いてあるかがすべて頭の中に叩き込まれているのは、トリニティのスタッフは皆同じだが、ブリャナハ教授の頭の中にはビンチーの6巻本の *Corpus* もすべて叩き込まれているのかと思わせるものがある。「たしか同じような例文がある」と言って *Corpus* をペラペラめくりだしたかと思うと、すぐに見つけるということが度々あった。緊張感あふれる授業のなかで、ウーリッヒ博士などが訳を当てられて時々間違えることがあると、妙にホッとしたものである。

一方、ダブリン高等研究所の2001年度のセミナーでは、同所研究員の一人が準備中の博士論文で扱っている法律文書の講読を行った。参加者を指名して訳を当てていくという方式も、また主要な参加者も大学院セミナーと共通している。こちらの参加者は研究者ばかりであったが、同研究所ケルト学部門の責任者であるケリー教授は快く参加を許可してくださり、末席に加わらせていただいた。参加者からは指摘や意見が活発に出され、若い研究者にとって非常に有益かつ実践的な研鑽の場であるが、前年のセミナーではケリー教授自らがテキスト講読を行っていたように、必ずしも若手のためだけではない、研究者相互の勉強と意見交換の場となっている。それにしても、授業その他の仕事で忙しいはずの先生方が、毎週きちんと準備をして参加されているのには頭がさがる。同時に、法律文書を読むためにはこれほどの努力が必要なのだと、改めて心の引き締まる思いがした。サイクリング用ヘルメットをかぶり、雨が降ろうとかまわず自転車に乗

って颯爽と研究所にやってくるウーリッヒ博士やケヴィン・ブリャナハ博士たちの、学生時代と変わらないような実に軽いフットワークも印象的であった。

最後に、学会のことにも簡単に触れておこう。中世史関係では、毎年6月にメヌース大学で二日間にわたる中世史学会が開催され、英米を中心に海外からも歴史、文学、言語、美術史などの研究者たちが集まる。ティータイムには手作りの焼き菓子をつまみながら談笑に花が咲き、また学会後には参加者有志が車を出して遺跡見学の「遠足」を行ったりと、なごやかな雰囲気である。比較的若手の研究者や大学院生の報告も多い。アイルランド中世研究の現状や傾向を知り、研究者たちに顔を合わせられる格好の場といえる。11月にはダブリン高等研究所ケルト学部門の年次大会があり、こちらは主にアイルランド語研究と歴史研究の多彩な顔ぶれが集まる。参加費無料ながら研究所近くのホテルでの豪華ランチが付くというありがたい特典はあるが、報告の半数近くが現代アイルランド語でなされるというのが難点である（幸い中世史は英語での報告がほとんどだ）。こうした毎年恒例の学会のほか、2002年1月には Brehon Law Project のシンポジウムが開催され、中世史と古アイルランド法研究の著名な研究者の報告を聞くことができた。古アイルランド法研究の振興を目的としたこのプロジェクトの運営は順調とは言えないようだが、今後軌道に乗ることを期待したい。

古アイルランド法研究の巨人ピンチーは、かつて古アイルランド語の勉強を志した時に相談をしたアイルランド語研究の権威バージンから、法律文書の編纂と訳を一人前にこなせるようになるまでに「最低10年」かかると言われ、そしてそれはその通りであったと書いている。そんな逸話を知りつつ、無謀にも古アイルランド法研究を志して古アイルランド語の勉強を始めてから5年が経とうとしている。ピンチーならば道半ばというところであろうが、私にとってはまだようやく最初の一、二歩を踏み出したに過ぎない。学べば学ぶほど、言葉の難しさ、史料としての扱いの難しさがわかってくる毎日である。正直に言って、自信をなくし、諦めたくなることが何度かあった。そんななかでの留学体験は、私にとって、実際的なスキルを学んだということ以上に大きな意味があった。あれだけの知識を持つ研究者たちが試行錯誤しながら研究を進めている姿を目の当たりにしてみれば、自分の苦勞など至極当然なのだと思えてきたし、まだまだ努力が足りないのだと思うようになった。古アイルランド法研究はいまだに険しい道にはちがないが、その道を嬉々として切り拓いている人たちがアイルランドには幾人もいる。これほど心強いことはなかった。

2002年9月半ば、論文を提出してすぐに帰国の途に着いた。その後学外の試験官による論文審査があり、5月に受けた筆記試験の結果とあわせて、翌年2月に結果が発表された。何事につけ物事がゆっくり進むお国柄なので、さらに3ヵ月後によく修士の学位記が届いた。文面はアイルランド語ではなく、ラテン語で書かれていた。振り返ってみれば、2年間の歳月は飛ぶように過ぎてしまった。その大半をコース・ワークと論文に費やし、充実した日々であったが、やり残したことも多い。もしもう一度滞在の機会があるなら、と考えることがある。今度は写本室と図書館にこもる日々を送ってみたいとも思うのだが、しかし自然と足はブリャナハ教授やケリー教授のセミナーに向かってしまうかもしれない。熱気と緊張感を、いつまでも忘れずにいられるように。